

## 地震！隣に外国人がいたら・・・

防災システム研究所 所長 山村 武彦

### ◆外国人旅行者の心配事

英語の旅行ウェブサイト「Tokyo Cheapo」と「Japan Cheapo」が2024年(令和6年)7月に実施したアンケート調査によると、「日本を旅行するときの最大の恐れは何ですか？」の回答1位は「自然災害(31%)」で、2位の「病気・事故(30%)」を僅差で上回った。能登半島地震から半年後の調査だったこともあるが、確かに日本は地震などの自然災害が多い。昨年1年間に震度1以上の地震は4456回、平均すると毎日2時間に1回は日本のどこかで地震が発生していた計算だ。

今年も1月6日、島根県東部を震源とするマグニチュード(M)6.4の地震が発生。島根県東部と鳥取県西部で最大震度5強を観測。余震が頻発し立て続けに4回も緊急地震速報(警報)が発表された。震度5弱を観測した米子市にいた知人は「緊急地震速報とほぼ同時に揺れ始め、すぐ激しい揺れになり怖かった」という。もし、そこに地震慣れしていない外国人旅行者がいたら、日本人以上に怖い思いをしたに違いない。

### ◆頼りは近くにいる日本人

突然スマホの警報音が鳴り「地震です！」が繰り返され、エリアメールで「緊急地震速報 ○○○で地震発生。強い揺れに備えてください(気象庁)」とメッセージが入っても、日本語が分からない人には何が起きたか理解できない。そこで観光庁は、外国人旅行者向け災害時情報提供アプリ「Safety tips」のダウンロードを推奨してきた。このアプリは緊急地震速報や津波警報などを15言語でプッシュ通知してくれ、母国大使館へのワンタップダイヤルや発災時に役立つリンクもある。

しかし、母国語で受信できたとしても、その場でどう行動するかが重要。頼りは近くにいる日本人だ。異国で経験のない緊急事態に巻き込まれた時、多くの外国人は近くにいる人と同じ行動を取ろうとするからである。

昨年の訪日外国人数は約4270万人で過去最多を記録した。彼らは日本の印象を「清潔で治安が良い」「食べ物が美味しい」とともに「親切で礼儀正しい」と日本人への好感度を挙げる。だからこそ発災時、助けを必要とする要配慮者がいたら、近くの人が力になってあげたいものである。

### ◆学校で教えてほしい「人を助ける英語や行動」

例えば緊急地震速報を受信した時、隣に外国人がいたら躊躇(ちゅうちょ)せず、「Earthquake ! It's okay, follow me」(地震です！大丈夫、私に付いてきてください)と声をかけ、屋内なら頑丈なテーブルの下へ、屋外ならガラスや転倒落下物の少ない場所に誘導。姿勢を低くして両手で頭を守るポーズなど、自ら安全行動を示して見せると良い。

英語は文法も大切だが、一刻を争うときは分かりやすい単語やボディーランゲージの方が相手に届く。学校などで人を助ける英語や行動を教えてほしい。

揺れが収まったら余震に注意し、さらに安全な一時滞在施設や避難場所へ案内する。落ち着いたら、多言語対応の自治体防災メール、交通機関の運行情報サイトなどのアドバイスができれば完璧。

同じ時代に同じ地域で災害に遭遇したら、それはもう運命共同体だ。災害に不安を持つ外国人も、いざというときは近くの日本人が助けてくれるとなれば、絶対安全ではないが、日本は安心して旅行のできる国になるのである。

(やまむら たけひこ)